

# シフトした線形システムに対する GMRES( $m$ )法の有効性について

平野 友貴 野寺 隆  
慶應義塾大学理工学部

## 1 はじめに

大規模な線形計算の解法としてGMRES( $m$ )法がある。このGMRES( $m$ )法は、大型で疎な非対称正則行列を係数にした線形システム(連立1次方程式)

$$Ax = b, \quad A \in \mathbb{C}^{n \times n} \quad x, b \in \mathbb{C}^n \quad (1)$$

を解くための反復法の1つである。

本稿で扱うシフトした線形システムとは、

$$\hat{A}\hat{x} = b, \quad \hat{A} \in \mathbb{C}^{n \times n} \quad \hat{x}, b \in \mathbb{C}^n \quad (2)$$

であり、ここでの係数行列 $\hat{A} = A + \alpha I$  ( $\alpha \in \mathbb{C}, I: n \times n$ の単位行列)も正則とし、右辺項 $b$ は上の式(1)と同一である[1]。

これら2つの線形システムを解くにあたり、従来のGMRES( $m$ )法を用いてもいいが、A.Frommerら[2]が提案したShifted-GMRES( $m$ )法を用いれば、少ない計算コストで計算できる。

## 2 GMRES( $m$ )法

GMRES( $m$ )法は、1986年にY.Saadら[3]によって提案された、クリロフ部分空間法の1つである。この解法は、初期残差ベクトルを $r_0 (= b - Ax_0)$ として、クリロフ部分空間を用いる。

$$K_m(A, r_0) = \{r_0, Ar_0, A^2r_0, \dots, A^{m-1}r_0\}$$

この上に、正規直交ベクトルを各列にもった基底行列

$$V_m = [v_1, v_2, \dots, v_m]$$

を生成する。これを用いて近似解 $x_m$ を

$$x_m = x_0 + V_m y$$

と構成する。ここでの $y$ は、残差ノルムの最小2乗問題

$$\begin{aligned} J(y) &= \min_y \|\beta v_1 - AV_m y\| \\ &= \min_y \|V_{m+1}(\beta e_1 - H_m^* y)\| \\ &= \min_y \|\beta e_1 - H_m^* y\| \end{aligned} \quad (3)$$

の解である。ただし、 $\beta = \|r_0\|_2$ であり、 $H_m^*$ はアーノルディ過程で得られる上ヘッセンベルグ行列である。式(3)は、通常 $H_m^*$ をギブンス回転行列でQR分解することによって解くことができる。

## 3 Shifted-GMRES( $m$ )法

ここでは、上で述べたGMRES( $m$ )法を、シフトした線形システムも解くように変形を施したShifted-GMRES( $m$ )法について述べる。この解法は、クリロフ部分空間の性質を利用したもので、各反復で行なうアーノルディ過程での基底行列の生成を最小限にとどめ、計算コストのかかる行列ベクトル積を減らすことができる。

### 3.1 クリロフ部分空間

GMRES( $m$ )法はクリロフ部分空間法の1つで、近似解 $x_m$ が

$$x_m \in x_0 + K_m(A, r_0)$$

となるような反復法である。式(2)のシフトを行なったものに関しても同様に、

$$\hat{x}_m \in \hat{x}_0 + K_m(\hat{A}, \hat{r}_0)$$

となるのは明らかである。ただし、 $\hat{r}_0 = b - \hat{A}\hat{x}_0$ とする。

ここで、初期近似解を $x_0 = \hat{x}_0 = 0$ とすれば、 $r_0 = b - Ax_0, \hat{r}_0 = b - \hat{A}\hat{x}_0$ より、 $r_0 = \hat{r}_0 = b$ となる。すると、2つのクリロフ部分空間は、

$$K_m(A, b) = \text{span}\{b, Ab, A^2b, \dots, A^{m-1}b\}$$

$$K_m(\hat{A}, b) = \text{span}\{b, \hat{A}b, \hat{A}^2b, \dots, \hat{A}^{m-1}b\}$$

となり、線形性から $K_m(A, b) = K_m(\hat{A}, b)$ が成立し、クリロフ部分空間が一致する。よって、GMRES( $m$ )法の性質から、アーノルディ過程で得られる基底行列が同じものになり、元の線形システムで1度だけ基底行列を生成すればよいことがわかる。

しかし、リスタートによって  $\mathbf{x}_m \neq \hat{\mathbf{x}}_m$  となり、リスタートした時点の初期残差が異なり、 $K_m(A, \mathbf{r}_m) \neq K_m(\hat{A}, \hat{\mathbf{r}}_m)$  になってしまう。この状況を修正するため、「共線形条件 (colinear condition)」を加える必要がある。この条件とは、

$$\hat{\mathbf{r}}_m = \beta_m \mathbf{r}_m, \quad \beta_m \in \mathbb{C} \quad (4)$$

である。これは、

$$\hat{\mathbf{r}}_0 = \beta_0 \mathbf{r}_0, \quad \beta_0 \in \mathbb{C} \quad (5)$$

として初期残差の条件でもよい。

この条件は

$$\left\{ \begin{array}{l} \cdot A: \text{正定値行列} \\ \quad (\operatorname{Re}(A\mathbf{x}, \mathbf{x}) > 0, \quad \forall \mathbf{x} \neq 0) \\ \cdot \operatorname{Re}(\alpha) > 0 \end{array} \right. \quad (6)$$

のとき、成り立つことが分かっている [2]。

### 3.2 アルゴリズム

ここでは、Shifted-GMRES( $m$ ) 法のアルゴリズムを式(4)の共線形条件から求めることにする。

$$\begin{aligned} \hat{\mathbf{r}}_m &= \beta_m \mathbf{r}_m \\ \Leftrightarrow \mathbf{b} - \hat{A}(\hat{\mathbf{x}}_0 + V_m \hat{\mathbf{y}}_m) &= \beta_m V_{m+1} \mathbf{z}_{m+1} \\ \Leftrightarrow \hat{\mathbf{r}}_0 - \hat{A} V_m \hat{\mathbf{y}}_m &= V_{m+1} \mathbf{z}_{m+1} \beta_m \end{aligned}$$

ここで、シフトした線形システムに対する上ヘッセンベルグ行列  $\hat{H}_m^*$  を定義する。

$$\hat{H}_m^* = H_m^* + \alpha \begin{bmatrix} 1 & & & \\ & \ddots & & \\ & & 1 & \\ 0 & \dots & 0 & \end{bmatrix} \in \mathbb{C}^{(m+1) \times m}$$

これを用いて、 $\hat{A} V_m = V_{m+1} \hat{H}_m^*$  より

$$\begin{aligned} \Leftrightarrow \beta_0 \mathbf{r}_0 - V_{m+1} \hat{H}_m^* \hat{\mathbf{y}}_m &= V_{m+1} \mathbf{z}_{m+1} \beta_m \\ \Leftrightarrow V_{m+1} (\hat{H}_m^* \hat{\mathbf{y}}_m + \mathbf{z}_{m+1} \beta_m) &= \beta_0 \mathbf{r}_0 \\ \Leftrightarrow \hat{H}_m^* \hat{\mathbf{y}}_m + \mathbf{z}_{m+1} \beta_m &= \beta_0 \|\mathbf{r}_0\|_2 \mathbf{e}_1 \end{aligned}$$

となる。最後の式を行列表現すると、

$$\begin{bmatrix} \hat{H}_m^* & \mathbf{z}_{m+1} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \hat{\mathbf{y}}_m \\ \beta_m \end{bmatrix} = \beta_0 \|\mathbf{r}_0\|_2 \mathbf{e}_1$$

であり、この式をQR分解により、解  $\hat{\mathbf{y}}_m, \beta_m$  を求める。この解が求まると、

$$\hat{\mathbf{x}}_m = \hat{\mathbf{x}}_0 + V_m \hat{\mathbf{y}}_m$$

から、シフトした線形システムの解  $\hat{\mathbf{x}}$  が得られる。

以上の式を従来のGMRES( $m$ ) 法のアルゴリズムに組み込めば、簡単にShifted-GMRES( $m$ ) 法のアルゴリズムが得られる。

### 3.3 収束性

条件(6)を満たす行列をもつような、式(2)のシフトした線形システムの収束性について考える。なお、通常の式(1)を解くGMRES( $m$ ) 法に関する収束性はY.Saad[4]で保証されている。

2つの線形システムの残差ノルムは、文面の関係で証明は省略するが、

$$\|\hat{\mathbf{r}}_m\|_2 \leq |\beta_0| \|\mathbf{r}_m\|_2$$

という関係がある [2]。これにより、通常は初期近似解を  $\mathbf{x}_0 = \hat{\mathbf{x}}_0 = 0$  とするので、式(5)の初期残差についての共線形条件から  $\beta_0 = 1$  となり、シフトしたものに対する残差  $\hat{\mathbf{r}}$  は常に元の残差  $\mathbf{r}$  よりも小さくなる。よって、元の線形システムが収束すれば、シフトした線形システムも収束し、なおかつ速く収束することになる。

## 4 おわりに

以上で述べてきたShifted-GMRES( $m$ ) 法は従来のGMRES( $m$ ) 法よりも速く収束することができる。また、そのアルゴリズムの簡易性も注目すべき点である。その有効性を検証するために、発表当日は、Shifted-GMRES( $m$ ) 法と従来のGMRES( $m$ ) 法を比較した数値実験の結果を報告する。

## 参考文献

- [1] R. Freund : Solution of shifted linear systems by quasi-minimal residual iterations, in *Numerical Linear Algebra*, L. Reichel, A. Ruttan, and R. S. Varga, eds., de Gruyter, Berlin, pp. 101-121 (1993).
- [2] A. Frommer and U. Glässner : Restarted GMRES for shifted linear systems, *SIAM J. Sci. Comput.*, Vol. 19, No. 1, pp. 15-26 (1998).
- [3] Y. Saad and M. H. Schultz : GMRES: A generalized minimal residual algorithm for solving nonsymmetric linear systems. *SIAM J. Sci. Stat. Comput.*, Vol. 7, pp. 856-869 (1986).
- [4] Y. Saad : Iterative methods for sparse linear systems, *PWS Publishing, Boston, MA*, (1996).